秋期福音特別集会（2）（京都）
羔の婚姻
――ヨハネ黙示録第19～20章――

１９８４年11月25日
小池辰雄

最後の審判　羔の婚姻　アダム・イブの結婚　ヤコブの結婚　ホセアの結婚　地上にあって天人　羔の婚宴に招かれる者　キリストと一つになる　怒りの酒槽　千年王国　第一の復活　生命の書

【ヨハネ黙示録19】

1この後われ天に大いなる群衆の大声のごとき者ありて、斯く言うを聞けり。曰く『ハレルヤ、救いと栄光と権力とは、我らの神のものなり。2その御審は真にして義なるなり、己が淫行をもて地を汚したる大淫婦を審き、神の僕らの血の復讐を彼になし給いしなり』

3また再び言う『ハレルヤ、彼の焼かるる煙は世々限りなく立ち昇るなり』

4ここに二十四人の長老と四つの活物と平伏して御座に坐したもう神を拝し『アァメン、ハレルヤ』と言えり。5また御座より声出でて言う『すべて神の僕たるもの、神を畏るる者よ、小なるも大いなるも、我らの神を讃め奉れ』

6われ大いなる群衆の声おおくの水の音のごとく、烈しき雷霆の声の如きものを聞けり。曰く『ハレルヤ、全能の主、われらの神は統治すなり、7われら喜び楽しみて之に栄光を帰し奉らん。そは羔羊の婚姻の期いたり、既にその新婦みずから準備したればなり。8彼は輝ける潔き細布を著ることを許されたり、此の細布は聖徒たちの正しき行為なり』

9御使また我に言う『なんじ書き記せ、羔羊の婚姻の宴席に招かれたる者は幸福なり』と。また我に言う『これ神の真の言なり』10我その足下に平伏して拝せんとしたれば、彼われに言う『慎みて然すな、我は汝およびイエスの証を保つ汝の兄弟とともに僕たるなり。なんじ神を拝せよ、イエスの証は即ち預言の霊なり』

11我また天の開けたるを見しに、視よ、白き馬あり、之に乗りたもう者は「忠実また真」と称えられ、義をもて審き、かつ戦いたもう。12彼の目は焔のごとく、その頭には多くの冠冕あり、また記せる名あり、之を知る者は彼の他になし。13彼は血に染みたる衣を纏えり、その名は「神の言」と称う。14天に

在る軍勢は白く潔き細布を著、馬に乗りて彼にしたがう。15彼の口より利き剣いづ、之をもて諸国の民をうち、鉄の杖をもて之を治め給わん。また自ら全能の神の烈しき怒りの酒槽を践みたもう。16その衣と股とに『王の王、主の主』と記せる名あり。

17我また一人の御使の太陽のなかに立てるを見たり。大声に呼ばわりて、中空を飛ぶ凡ての鳥に言う『いざ神の大いなる宴席に集いきたりて、18王たちの肉、将校の肉、強き者の肉、馬と之に乗る者との肉、すべての自主および奴隷、小なるもの大いなる者の肉を食え』

19我また獣と地の王たちと彼らの軍勢とが相集まりて、馬に乗りたもう者および其の軍勢に対いて戦闘を挑むを見たり。20かくて獣は捕えられ、又その前に不思議を行いて獣の徽章を受けたる者と、その像を拝する者とを惑わしたる偽預言者も、之とともに捕えられ、二つながら生きたるまま硫黄の燃ゆる火の池に投げ入れられたり。21その他の者は馬に乗りたもう者の口より出づる剣にて殺され、凡ての鳥その肉を食いて飽きたり。

【ヨハネ黙示録20】

1我また一人の御使の底なき所の鍵と大いなる鎖とを手に持ちて、天より降るを見たり。2彼は龍、すなわち悪魔たりサタンたる古き蛇を捕えて、之を千年のあいだ繋ぎおき、3底なき所に投げ入れ閉じ込めて、その上に封印し、千年の終るまでは諸国の民を惑すことを勿らしむ。その後、暫時のあいだ解き放さるべし。

4我また多くの座位を見しに、之に坐する者あり、審判する権威を与えられたり。我またイエスの証および神の御言のために馘られし者の霊魂、また獣をもその像をも拝せず己が額あるいは手にその徽章を受けざりし者どもを見たり。彼らは生きかえりて千年の間キリストと共に王となれり。5（その他の死人は千年の終るまで生きかえらざりき）これは第一の復活なり。6幸福なるかな、聖なるかな、第一の復活に干る人。この人々に対して第二の死は権威を有たず、彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年のあいだ王たるべし。

7千年終りて後サタンは其の檻より解き放たれ、8出でて地の四方の国の民、ゴグとマゴグとを惑し戦闘のために之を集めん、その数は海の砂のごとし。9斯て彼らは地の前面に上りて聖徒たちの陣営と愛せられたる都とを囲みしが、天より火くだりて彼等を焼き尽し、10彼らを惑したる悪魔は、火と硫黄との池に投げ入れられたり。ここは獣も偽預言者もまた居る所にして、彼らは世々限りなく昼も夜も苦しめらるべし。

11我また大いなる白き御座および之に坐し給うものを見たり。天も地もその御顔の前を遁れて跡だに見えずなりき。12我また死にたる者の大いなるも小なるも御座の前に立てるを見たり。而して数々の書展かれ、他にまた一つの書ありて展かる、即ち生命の書なり、死人は此等の書に記されたる所の、その行為に随いて審かれたり。13海はその中にある死人を出し、死も陰府もその中にある死人を出したれば、各自その行為に随いて審かれたり。14斯て死も陰府も火の池に投げ入れられたり、此の火の池は第二の死なり、15すべて生命の書に記されぬ者は、みな火の池に投げ入れられたり。

●最後の審判

黙示録第19章です。

1この後われ天に大いなる群衆の大声のごとき者ありて、斯く言うを聞けり。曰く『ハレルヤ、救いと栄光と権力とは、我らの神のものなり。2その御審は真にして義なるなり、己が淫行をもて地を汚したる大淫婦を審き、神の僕らの血の復讐を彼になし給いしなり』

そういう大きな声が聞こえてきた。

「神の審判は真であり義である」

という。

「世界の歴史は世界の審判史である」

と、フリードリッヒ・シラーがその詩の中で言ってます。歴史は、見たところは非常に不公平なように見える。けれども、その奥ではちゃんと神の審判がある。神さまはちっとも分かってないようだけれども、実はその奥でちゃんと見ておられる。それが最後に現象してくるのは、この

「最後の審判」

というところになるわけです。ただ最後に審判しているのではない。もう時々刻々、この歴史は審判されている。そういう「義であり真である神」を本当に信頼して信ずれば、非常に気が落ち着くわけです。また、厳かで、力がくるわけです。神さまは、

「仇を返すは我にあり」

（「エホバよ仇をかえすは汝にあり、神よあたを報すはなんじにあり。ねがわくは光をはなちたまえ」（詩篇94・1））

と言われた。詩篇の中にもありますが。「仇を返す」とは、要するに、「法がなっていく」ということです。自然界の法則、道徳界の法則、霊界の法則、全部これは法が成っている世界です。それから外れると、みなおかしなことになる。

カントが有名な『実践理性批判』の終りの方で、

「これを思えば思うほど、驚嘆と畏敬の念にかられる二つのものがある。わが頭上の星
　辰の空と、わが内なる道徳の法である」
という有名な言葉を発しましたが、実はもう一つカントは言い忘れている。それは霊界の法則のことです。道徳哲学としては『実践理性批判』は是非とも読まなければならない本です。今の若い方々がああいう古典を読まないので本当に困る。法哲学というのは非常に大事だと私は思う。法の宗教哲学と言っていいと思う。

そういう法の世界、それが「真なるもの」です。在るべきものが在るべき所に置かれる、オリエンティーレンされる、それが「審判」です。日本語では「審判」という言葉ですけれども、ヘブライ語の「シャーファット」という言葉はむしろ、

「ちゃんとしかるべく定める」

というような意味です。

「涙を流し血を流した人たち、地上では本当に報いられなく終わった人たち、その復讐が、即ち本当の認めというものが、虐げた人たちや不当な事をした人たちに向かってなされたのである。だから喜べ」

ということがその次に出てくるわけです。そういう、

「最後の審判、最後の総くくりということが必ず来る。それは現在においてなされつつ、それが最後において現象する」

ということです。

「歴史は、言葉の深い意味における理性の、法理の行われている世界である」

ということを哲学的に叙したのはヘーゲルです。カント、ヘーゲル、シェリング、イスラムテなんていうのは大変な哲学者たちです。

●羔の婚姻

3また再び言う『ハレルヤ、彼の焼かるる煙は世々限りなく立ち昇るなり』
4ここに二十四人の長老と四つの活物（いきもの）と平伏して御座（みくら）に坐したもう神を拝し『アァメン、ハレルヤ』と言えり。

4章、5章、11章に似たようなことが出てきます。

5また御座より声出でて言う『すべて神の僕たるもの、神を畏るる者よ、小なるも大いなるも、我らの神を讃め奉れ』

この19章からは讃美、讃美ということになってくる。なぜ、そうかというと、

6われ大いなる群衆の声おおくの水の音のごとく、烈しき雷霆（いかづち）の声の如きものを聞けり。曰く『ハレルヤ、全能の主、われらの神は統治（すべしら）すなり、7われら喜び楽しみて之に栄光を帰し奉らん。そは羔羊の婚姻の期（とき）いたり、既にその新婦（はなよめ）みずから準備（そなえ）したればなり。

この6、7節は非常に大事な節です。

[8]彼は輝ける潔き細布を著ることを許されたり、此の細布は聖徒たちの正しき行為なり』

これはみな象徴的なものです。

この「羔の婚姻」ということを題材にして詩を書いたのは、私の恩師である藤井武先生です。藤井先生は奥さんを亡くされた。それからしばらく沈黙されておられましたが、『旧約と新約』という月間雑誌の巻頭に詩を掲げ始めた。そしたら、読者が減ったという。先生は私たちに言われました、

「一ヶ月の三分の二はこの詩のために使っている。後の三分の一で散文のところを書いている」

と。先生にとっては、あの詩を書くことはそれ自身が生活であった。先生はあと二年、生きておられたならば、完結するはずだったけれども、残念ながら黙示録の三分の一位まで来て、仆れた。先生の机の上に詩の絶筆が残っていました。

「第三の禍害が来たならば、世界は哀哭切歯するだろう」

という、預言みたいな言葉で終わっている。黙示録に出てくる「第三の禍害」というのは、我々の歴史でいうと第三次戦争のことを預言しているようですね。そしたら、もうお終いだと。そういうように響いてきます。奥さんを天界に送ってから、天地相応えて、あの詩を書いておられた。

「羔の婚姻」とは、普通の人が聞くと、何事かと思うだろうね。「羔」という字は、羊を焼くという、焼かれるような羊は小羊がおいしいという、食べ物の方からきている。

●アダム・イブの結婚

「婚姻」のことは、旧約から話しだしたら切りがないけれども、一番先にでてくるのは、もちろん、創世記2章のアダム・イブの結婚です。

[18]エホバ神言いたまいけるは人独なるは善らず、我彼に適う助者を彼のために造らんと。……[21]是に於てエホバ神アダムを熟く睡らしめ睡りし時その肋骨の一つを取り肉をもてその処を填塞たまえり。[22]エホバ神アダムより取りたる肋骨を以て女を造り之をアダムの所に携きたりたまえり。[23]アダム言いけるは此こそわが骨の骨わが肉の肉なれ、此は男より取りたる者なれば之を女と名くべしと。[24]是故に人は其父母を離れて其妻に合い二人一体となるべし。[25]アダムと其妻は二人ともに裸体にして愧ざりき。」（創世記2・18…25）

「アダムを眠らせて、その肋骨をとって女をつくった」

なんていうお伽話みたいなことが書いてある。

「人が独りで居るのは可哀相だ、これに適う者を与えよう」

というわけです。一なる存在が二にされる。だから、これは本来は一なんです。一にして二、二にして一というのが婚姻関係です。アダムが言った、

「此こそわが骨の骨わが肉の肉なれ」

は、聖書で最初の詩です。素晴らしい言葉ですね。

創世記と黙示録は、アルファにしてオメガというわけで、聖書の中で始めと終りで非常に大事です。創世記はよく読みなさいよ。非常に面白いし、また深遠な意味がその中に隠れていますから。

●ヤコブの結婚

イスラエルの十二支派ができたヤコブのことは創世記28、29、30、35章あたりに出てます。ヤコブの結婚は普通の結婚とはちょっと違う。

「22……それヤコブの子は十二人なり。23即ちレアの子はヤコブの長子ルベンおよびシメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルンなり。24ラケルの子はヨセフとベニヤミンなり。25ラケルの仕女ビルハの子はダンとナフタリなり。26レアの仕女ジルパの子はガドとアセルなり。是等はヤコブの子にしてパダンアラムにて彼に生れたる者なり。」（創世記35・22～26）

四人の女性から十二人の子供たちができて、これがイスラエル十二支派になるわけです。「アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ」という、ヤコブの跡を継いだ素晴らしい人物がヨセフです。キリストの前鏡だと言われるような人です。エジプトに売られて、兄弟たちを逆に救った人です。イスラエル十二支派というのはそのような特別な結婚におけるところの祝福の事態です。もちろん、今はこんなまねをしてはいかん。

「イスラエル」の事は創世記32章に出ています。

「22其夜おきいでて二人の妻と二人の仕女および十一人の子を導きてヤボクの渡をわたれり。23即ち彼等をみちびきて川を渡らしめ又有てる物を渡せり。24而してヤコブ一人遺りしが人ありて夜の明くるまで之と角力す。25其人己のヤコブに勝たざるを見てヤコブの髀の樞骨に触れしかば、ヤコブの髀の樞骨其人と角力する時挫離たり。26其人夜明けんとすれば我をさらしめよといいければ、ヤコブいう汝われを祝せずばさらしめずと。27是に於て其人かれにいう、汝の名は何なるや、彼いうヤコブなり。28其人いいけるは、汝の名は重ねてヤコブととなうべからずイスラエルととなうべし。其は汝神と人とに力をあらそいて勝ちたればなりと。29ヤコブ問うて請う、汝の名を告げよといいければ、其人何故にわが名をとうやといいて乃ち其処にて之を祝せり。30是を以てヤコブその処をベニエル（神の面）となずけて曰う、我面と面をあわせて神とあい見てわが生命なお存るなりと。」（創世記32・22～30）

ヤコブはヤボクの渡しで天使と相撲をとって股の番をはずされて負けた。けれども、ヤコブは天使に、

「私を祝さなければあなたを離さない」

と言ってしがみついたら、

「お前の名はこれからイスラエルとする」

と言われた。「イスラエール」というのは、

「神戦いたもう、神勝ちたもう」

という意味です。要するに、神に勝たれて、本当の神さまの勝利をいただく。我々も神・キリストにうち勝たれて、そして、キリストの勝利をいただく。このことはエレミヤもそういう体験をしている。エレミヤ記20章7節に、

「7エホバよ汝われを勧めたまいてわれ其勧に従えり。汝我をとらえて我に勝ち給えり。われ日々に人の笑となり人皆我を嘲りぬ。」（エレミヤ20・7）

「あなたが言えという事を言ったりしたりしていると、笑いとなり嘲りとなっている。あなたは私に勝って、私はあなたの言う事に従わざるをえない。もう馬鹿らしいから、言うのをよそうと思うと、あなたの言葉が私の骨の中で火のごとく燃えるから」

というのがこのエレミヤなんです。

「8われ語り呼ばわるごとに暴逆残虐の事をいう。エホバの言日々にわが身の恥辱となり嘲弄となるなり。9是をもて我かさねてエホバの事を宣べず、又その名をもてかたらじといえり。然どエホバのことば我心にありて火のわが骨の中に閉じこもりて燃ゆるがごとくなれば、忍耐につかれて堪難し。」（エレミヤ20・8～9）

「言わざらんと欲するも言わないではいられない、しないではいられない」

という。

「神さまによって止むにやまれずして動く、止むを得ず」

という言葉は素晴らしい言葉です。神の力、御意でもって止むを得ず、止むに止まれずしてすることが本当の言葉であり、本当の行為なんです。これを天的必然という。これが本当の自由です。本当の自由はそういう自由です。自分が無いんだ、我無き世界だから。

●ホセアの結婚

神とイスラエルとの関係を夫と妻との関係において身をもって証したのが預言者ホセアです。エレミヤと似たような預言者です。ホセア書2章19節に、

「19われ汝をめとりて永遠にいたらん、公義と公平と寵愛と憐憫とをもてなんじを娶り、20かわることなき信実をもて汝をめとるべし、汝エホバをしらん。」

（ホセア2・19～20）

イスラエルを民とすることを「めとる」という言い方をしている。そして、

「私の方は絶対に変わらないぞ。お前がどうあろうと、こっちは変わらない」

と。相手のどうこうによって変わるような愛は本当の愛ではない。人間の相対的な現実では、止むを得ずして離婚することもありますけれども、しかし、本当の愛というものは貫く。相手がそれで参るんです、

「こんなに悪い私をまだそんなに愛してくれるか」

と。それでもって変えられていく。変えられなければ離れていくのは仕方がない。神さまの愛は、キリストの愛は、我々どうにもならない者を、

「いや、どうにもならないからこそ、いよいよ愛するぞ」

というんです。

「私がお前の足のドロを洗わなければ、お前と私の関係はないんだ」

と、あの洗足のところでキリストがペテロに言われた。「足を洗う」とは、私たちの「罪を贖う」ことです。

「罪が贖われなくてよいのか。だったら、お前とは関係ないぞ」

と、キリストはそう言うわけです。

世界に救いを要しない人は一人もいない。誰でもが救を要する。ということは、すべては宗教人であるということです。パラダイス・ロストが現実なんだから。地上はどんなに幸福そうに見えたって、これは失われたる楽園なんだ。楽園回復、「パラダイス・リゲインド」をミルトンが書きましたが、アダム・イブの楽園状態を回復し、あの時の楽園以上の楽園にしたのが、黙示録のキリストです。その事態がこの黙示録19章以下なんだ。大変な現実です。

●地上にあって天人

私たちは地上にあって天人なんです。そのことはコロサイ書3章に書いてある。

「汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、

「もし」ではない。もうキリストと共に甦ってしまっているんだ。だから、

上にあるものを求めよ、キリスト彼処に在りて神の右に坐し給うなり。汝ら上にあるものを念い、地に在るものを念うな、汝らは死にたる者にして其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。」（コロサイ3・1～3）

キリストは私たちの隠れ蓑です。私たちは隠り身です、キリストの中に隠れたる身体である。

「エン・クリスト」

というのはそのことです。

最澄、空海の密教なんていうのは、それを読むと、私たち福音の者にはすぐ分かってしまう。現身（うつせみ）が即、仏の世界。即身即仏の世界です。

「南無と称（い）えば阿弥陀来にけりこの一つ身を我とはいわん仏とはいわん」

という。

「南無と言ったら、阿弥陀さんが、無量寿無量光の覚者がやってきた。この一つ身を私と言おうか、仏と言おうか、仏さんと私は一つになっている」

と。

「我を見し者は父を見しなり」

と言ったキリストは神さまと一つになっていた。

「父と我とは一つなり」

とは一番短い大変な節です。

婚姻の関係はそういう関係です。神とイスラエル、キリストとエクレシアは――キリストに呼ばれた人たち、クリスチャンの群、これは「教会」ではない。本当は藤井先生が訳したとおり、

「召されたる者の団体」「召団」

です――そういう深い関係です。

アダムがエバに、

「お前は私の骨の骨、肉の肉なり」

と言った。「身体は一つだ、一心同体だ」と。だから、私たちにとって、

「キリストはわが骨の骨、肉の肉なり」

ということです。これを言わなかったら、ただ奥さんに言ったってダメだよ。キリストに向かって、

「あなたは私の骨の骨、肉の肉」

と言う。キリストの方からまた私たち一人ひとりに、

「お前は私の骨の骨、肉の肉だぞ」

と言ってくださる。相互関係です。

「血気の体あり、霊の体あり」

とパウロが言いましたが、そういった「霊の体」が既に信の現実において現象している。根源現象となっている。根源的な現象となっている。これは本当ですよ。

「我々がキリストの骨の骨、肉の肉」

であり、また

「キリストがわが骨の骨、肉の肉」

である。これが、我々とキリストとの関係です。エホバとイスラエル、キリストとエクレシア、また、キリストと各個人の関係が、そういった意味において、婚姻関係であるとい

うことです。

今は婚約時代です。黙示録の最後では、結婚のところになるわけです。これが我々が迎える「羔の婚姻」です。だから、

9御使また我に言う『なんじ書き記せ、羔羊の婚姻の宴席に招かれたる者は幸福なり』と。また我に言う『これ神の真の言なり』

という。

●羔の婚宴に招かれる者

ルカ伝14章15節。これは饗宴に招かれたわけだ。キリストはこの宴席が好きなんです、

「あれは食を貪り酒を好む者なり」

なんて言われたくらい。

「15同席の者の一人これらの事を聞きてイエスに言う『おおよそ神の国にて食事する者は幸福なり』16之に言いたもう『或人、盛んなる夕餐を設けて、多くの人を招く。17夕餐の時いたりて、招きおきたる者の許に僕を遣して「来れ、既に備わりたり」と言わしめたるに、18皆ひとしく辞りはじむ。初めの者いう「われ田地を買えり、往きて見ざるを得ず。請う、許されんことを」19他の者いう「われ五くびきの牛を買えり、之を験すために往くなり。請う、許されんことを」20また他の者いう「われ妻を娶れり、此の故に往くこと能わず」21僕かえりて此等の事をその主人に告ぐ、家主いかりて僕に言う

「怒りて」だよ、

「とく町の大路と小路とに往きて、貧しき者・不具者・盲人・跛者などを此処に連れきたれ」22僕いう「主よ、仰せのごとく為したれど、尚お余の席あり」23主人、僕に言う「道や籬の辺にゆき、人々を強いて連れきたり、我が家に充たしめよ。24われ汝らに告ぐ、かの招きおきたる者のうち一人だに、我が夕餐を味い得る者なし」』」（ルカ14・15～24）

「イスラエル、神の民、神の族なんて言ったって、お前たちはダメだ」と、キリストがこの烈しい譬えをもって言ってらっしゃる。

羔の婚宴に招かれる者は、いわゆる地上の立派な人ではない。地上の立派だとか立派でないとか、そんなことは問題でない。もしはっきり言うならば、地上で十字架を負った人たちです。地上で、何らかの意味において、十字架を負わなかった者は天国に入るわけにいかん。キリストと共に十字架を負ったことのない者は天国に行くわけにいかん。羔は十字架の羔です。新婦もまた十字架を負った新婦です。いわゆる

「めでたし、めでたし」

なんてものではない。

人間の側のいかなるマイナスも、キリストの前にはマイナスでなくなってしまう。なぜ、こちら側の状態を考えているか。棄ててみたらば逆に、その棄てられたものがもっと祝福されて展開してくる。実際、体験してみてください。本当にそうだから。キリストに対して、信に応えるに信をもってし、愛に応えるに愛をもってする。

だから、キリストはこういう烈しいことを言う。天国は実はそういう人たちの国だ。地上でご褒美をもらったり、人に誉められたのが、天国への資格ではない。神さまの審判というのは恐ろしい。

「俺こそは天国に行ける」

と思うと、天国の門の所で、

「ちょっと待て！」

と言われて、風がきてどこかへ吹き飛ばされてしまう。

人間はいかなる人をも品定めできません。できるのはキリストだけです。仏教徒であろうと、イスラム教徒であろうと、また逆に、どんなクリスチャンであろうと――レッテルクリスチャンではダメです――そんなことが神さまの差別にはならない。神さまの判断というものは、人の端倪（たんげい）すべからざるものです。「キリスト」の「キ」の字も知らなくたって、天国へ行く。

私は、人間が人間の品定めをすることが大嫌いなんだ、ことに成績でもって品定めすることが。

「落ちこぼれ」

なんて、なぜあんな言葉を使うか。一人ひとりは神さまの神品です。それを「落ちこぼれ」とは何事か。教育者があんな言葉を使うとは、けしからんと思う。逆にその子供を損ねて、不良少年、不良少女になってしまう。その責任はこっちにある。勉強ができるだけが人間ではない。一人ひとりいろいろな特色を持っている。その人が天から賜った特色を本当に活かしていく。それが本当の教育者だ。学校の制度なんか本当は大改革しなければいけない。画一的なことを言って、人間ができ上がるかというんだ。指紋すら、世界中に何億人いようと、私の指紋と同じ指紋はないというのだから、

「最大の芸術家は神さまだ」

ということはそのことなんです。神さまは同じものを絶対に造らない。一人ひとりが神さまの神品です。

ルカ伝14章にあるように、招かれながら、何か理由をつけて行かないということは、神・キリストの招きに対して、いかなる理由も成り立たない。成り立たせたら、その人はどっこいということになって、ヘタすると煉獄から地獄へ行ってしまう。ダンテは、

「煉獄で少し待っていろ、しっかり鍛えられて来い。そして天界へ段々移される」

というように『神曲』に書いているが、あれはあれで結構ですけれども。地上の実存が次

の世界の自分の位置を自分が決定する。それを神さまはちゃんと見ておられる。

「お前はここだよ」

と、天国の位置がある。それは誰も分からない。

しかし、十字架上の片一方の盗賊がイエスに、

「私は散々悪いことをしました。十字架に架けられても、それは当然なんです。せめても、天国にいらっしゃる時には私を覚えてください」

と言ったら、

「お前は、今日私と一緒にパラダイスだ」

と、キリストは仰った。最初にキリストと一緒に天国へ行ったのは、散々悪いことをして最後に悔改めたところの、回帰したところの盗賊なんです。片一方は、

「お前は神の子なら、俺たちを救ったらいいだろう」

なんて傲慢なことを言った。これは地獄往き。これがはっきり人類を二つに分けている。心が砕けるか、砕けないか、そのどちらか。ルカ伝15章の放蕩息子の話もある。

キリストの福音というのは本当にギリギリのところにきて、これを救うんですよ。

「お前はもう遅すぎた」

なんてことはひとつもない。

「絶対無条件の救いの福音である」

という。相対的な現実では、人間の思想や主義にはそれぞれの部分的な、或はある次元の善さはありますよ。そんなものと福音はケタが違う。普通のいわゆるイデオロギーの人間にはそのことが分からないんだな。だから私は、

「イデオロギーを乗り越えろ」

と言っている。イデオロギーでは絶対に平和はきませんから。

「愛・信・望」

ということ。聖霊の現実は愛です。私たちは今、福音の最後のところ、黙示録の大希望、終末的な希望の世界を学びつつある。その中に入りつつある。愛は現在、望は未来、信は過去。過去は現在となる。キリストの十字架は現在となる。望もまた現在となる。だから、

「永遠の現在」

ということ。信仰の世界は現在であり、現実である。信仰が現在であり現実でなかったら、信仰は観念になる。

「御国を来たらせ給え」

と祈る。御国は既に来ている、私たちの魂の中に。だから、「来たらせ給え」と祈れる。そういうズレのない世界です。絶対矛盾の自己同一ということ。

「神―キリスト―我」

というこの現在です。

「場所はキリストの中、時は現在」
です。
「現在はすぐ過去になるではないか」
なんて、そうではない。この現在は過去にならない。永遠的現在、時計の針が止まってしまっているような現在です。
現在の中にそのようにしてあるから、
「もういつ次の世界に行っても結構です」
という。ヒルティが、
「次の世界に行くのはちょうど、隣のお茶の間に行くようなものだ」
と、いいことを言った。コーヒーを飲みにいくように。天つ真清水を――お酒が好きなら、ネクタールを――飲みにいけばいい。
婚姻というのは、言葉で表すことのできない盛んなるものです。黙示録3章に、
「視よ、われ戸の外に立ちて叩く、人もし我が声を聞きて戸を開かば、我その内に入りて彼とともに食し、彼もまた我とともに食せん。」（黙示録3・20）
「私は戸の外に立って叩いているではないか、早く戸をあけろ。入って一緒にご馳走を食べるよ」
と。あれは私は大好きなところだ。キリストはご馳走が好きだったらしい。そういう、キリストとの楽しさ。私たちはこうやってご飯を一緒に食べると非常に楽しい。あるいは、裸になって一緒にお風呂に入る。とにかく、身体（からだ）の世界、裸の世界です。

●キリストと一つになる

あなた方、これを耳で聞いていたってダメだよ、体（からだ）で聞いていなくては。目で見たってダメだ、体で見なくては。体で聞き、体で見る。本は身（からだ）で読む。これを「身読」と日蓮が言った。あるいは「色読」ともいう。同じことです。「からだ」というのは「全存在」ということです。知情意――知情意と霊――が分裂しないで全的なんです。それを身体という。非常に直（じ）か直かな言葉です。身体で触れる、体感する。ゲーテが、
「ゲフュール　イスト　アッレス」
と言ったが、私はあれを、
「体感は一切である」
と訳す。『ファウスト』の訳がいくつもあったって、誰も「体感」と訳していない。「感情、情感」ぐらいだ。ドイツ語の「ゲフュール」をゲーテはそこまでの気持で言ったかどうかは知らん。多分そうだと思いますけれども、ゲーテは総体的な気持を持っていますから。
「行為は一切である」
とも言った。言葉もまた行為である、行為もまた言葉であると。すべて全的ということが

大事です。分裂していない。無一ということ、みな同じです。無一物無尽蔵とか。

「我と父とは一つなり」

とか。

「一粒の麦地に落ちて破れずば…」

という。破れたら、根が生えて芽が出てそして大木なっていく、たくさんの種ができる。婚姻とは、私たちがキリストと一つになることです。個人であろうと、召団であろうと。

「全世界を得るとも一人の魂が救われなければ何だ」

とキリストが言ったでしょ。天秤の片一方に地球を置いて、もう片一方にたった一人を置くと、その一人の方が重いとキリストは言う。それくらい個の価値というものは無限大なものを持っている。あなた方一人ひとりはそのような存在なんです。そういう意味において、人格ということを本当に考えているかというんだ。本当の霊的人格というものはそういうものです。全世界を相手にできるかという。

アタナシウスは全世界を相手にして、

「いや、キリストは神と同質である」

ということを叫んだ。「似ている」のではない。「似姿」ではない。同質の相（すがた）、同相です。ドイツ語の「エーベンビルト」というのはいい言葉だ、「まさにその姿」だという。

「神の姿である」

と、コロサイ書にも出ている。キリストは神の姿です。私たちは本質において神の姿が内にできている。見えない。どんなに泥があったっていいよ、中に金剛石がある。

人間というものはみんな、相対的な判断をするんだね、

「それでも、まだこうです」

とか。そんなものは百年たっても

「それでもまだ」

なんだ。私なんかも、人間小池がいわゆる聖くなるなんていったって、「それでもまだ」で、いつまでたっても私は聖くならない。そんなものは私は問題にしない。その後ろの方に、聖いとか聖くないとかいう、相対的な判断を超えたものが来ている。

「潔めの信仰」

なんてものは困ったものだ。相対的な潔さなんてものを考えている。キリストによっていったら、もう透き通ってしまうから。

「遊女につく者は彼と一つ体となることを知らぬか『二人のもの一体となるべし』と言い給えり。主につく者は之と一つ霊となるなり。」（コリント前6・16～17）

という。一者です。プロティノスの宗教哲学。

神の婚姻の席に招かれた者は、地上で傷つき倒れ涙を流し血を流させられた人たちです。

誰にも認められない、誤解され、迫害され、そういうマイナスを一杯背負った人たちが天界では最も高いところにいる。

「御名のため受けし傷跡もたずして聖前にいずる恥知るやきみ」

という歌がある。

「御名のために受けた傷跡がなくして聖前に出ることができようか、そんなことはとんでもない恥だ。みな、傷を負って出ていけ」

と。御名のためだよ。もぅ、烈々たるものが湧いてきたでしょ。羔羊の婚姻というのは、そういう戦いの器の連中の婚姻です、男でも女でも。戦いといっても、武器を持つのではない。人生の戦いです。そういう人たちが祝福される。地上で

「めでたし、めでたし」

なんていうのはどっこい招かれない。「俺こそはアブラハムの裔（すえ）だ」なんて威張っているやつも来れない。これはキリストが仰るとおり。信仰の世界は、

「神―キリスト―我」

が一対一の関係です。いかなる相対関係もそこには通じない。

●怒りの酒槽

黙示録19章にもどります。

11 **我また天の開けたるを見しに、視よ、白き馬あり、之に乗りたもう者は「忠実また真」と称えられ、義をもて審き、かつ戦いたもう。**

これはもちろんキリストです。イエスの姿。

12 **彼の目は焔（ほのお）のごとく、その頭には多くの冠冕（かんむり）あり、**

「多くの冠冕あり」という言葉は私はあまり好きでない。それだから、ローマ法王なんか三重の冠なんかかぶってしまって困るんだ。これは私に言わせると、

「多くの光冠あり」

ということ。光輪が幾重にもなっている。光輪なら幾重あったっていいよ。私が画家なら、そういうように描くな。

「目は焔（ほのお）のごとく」

とある。「目は心の窓」という。目が炎だったなら、心の世界が、その魂が炎でなければ、目が炎にならない。魂が燃えてなければ。この炎は燃え尽きない。

「ベートーベンは火のような性格の男だ」

という言葉がある。第一級の人物はみな火の如き魂です。ダンテも、ゲーテもそうです。ゲーテは太陽が大好きなんだ。ダンテも星だ。星も向こうの方の太陽だ。

また記せる名あり、之を知る者は彼の他になし。

誰も分からない、神秘的な名が書いてある。

13 **彼は血に染みたる衣を纏えり、**
これはイザヤ書63章です。
その名は「神の言」と称う。
これはヨハネ1・1です。
14 **天に在る軍勢は白く潔き細布を著、馬に乗りて彼にしたがう。** 15 **彼の口より利き剣いづ、** 16 **その衣と股とに『王の王、主の主』と記せる名あり。**
これはもちろん霊的な剣です。
之をもて諸国の民をうち、鉄の杖をもて之を治め給わん。また自ら全能の神の烈しき怒りの酒槽を践みたもう。
キリストは審判の酒槽でその血を浴びているわけだ。イザヤ書63章に出ている事態です。けれども今度は、キリストは十字架では贖いの血で、自らの血をもって血染めになった。「血は生命のあるところ」ですから。だから、血を流した。
16 **その衣と股とに『王の王、主の主』と記せる名あり。**
ヨハネ伝19章に、
「ピラト罪標を書きて十字架の上に掲ぐ『ユダヤ人の王、ナザレのイエス』と記したり。」（ヨハネ19・19）
とある。キリストは「ユダヤ人の王」ではない。「王の王」で、一切の為政者の上に出ている者、霊界の王者です。
「わが国はこの世のものにあらず」
とキリストは言われた、
「私の国はこの世ではない。天界だ」
と。「王」という字は「統べ治めたもう者」という意味です。
17 **我また一人の御使の太陽のなかに立てるを見たり。大声に呼ばわりて、中空を飛ぶ凡ての鳥に言う『いざ神の大いなる宴席に集いきたりて、** 18 **王たちの肉、将校の肉、強き者の肉、馬と之に乗る者との肉、すべての自主および奴隷、小なるもの大いなる者の肉を食え』**
これは地上の悪いやつらのことをみんな言っている。その肉をお前たち鳥は食べていいぞと。
19 **我また獣と地の王たちと彼らの軍勢とが相集まりて、馬に乗りたもう者および其の軍勢に対いて戦闘を挑むを見たり。** 20 **かくて獣は捕えられ、又その前に不思議を行いて獣の徽章を受けたる者と、その像を拝する者とを惑わしたる偽預言者も、之とともに捕えられ、二つながら生きたるまま硫黄の燃ゆる火の池に投げ入れられたり。** 21 **その他の者は馬に乗りたもう者の口より出づる剣にて殺され、凡ての鳥その肉を食いて飽きたり。**

そういうように、全部滅ぼされてしまうということをいろいろな言い方でしている。キリストの口の息がサタン的な者を倒してしまうというような言葉も、テサロニケ書に出ています。みなこれは聖霊の力です。

●千年王国

黙示録20章に入ります。

1我また一人の御使の底なき所の鍵と大いなる鎖とを手に持ちて、天より降るを見たり。2彼は龍、すなわち悪魔たりサタンたる古き蛇を捕えて、之を千年のあいだ繋ぎおき、3底なき所に投げ入れ閉じ込めて、その上に封印し、千年の終るまでは諸国の民を惑すことを勿らしむ。その後、暫時のあいだ解き放さるべし。

妙なことが書いてある。これは「千年王国」ということ。サタンが千年の間、動けなくなってしまうから、非常に平和な時がくるわけだ。けれども、信仰者はこの平和な無事な時をのほほんと過ごしたらダメです。サタンがいなくても、今度は自分の中からサタンが出てくる。我々の生活でも家内安全・平穏無事とか言っていると、今度は魂が眠ってしまう。

「人間はとかくそうなるから、私メフィストは人を刺激してやるんだ」

と、ゲーテが『ファウスト』で書いているわけです。そういった何もないような平時に――我々も大体そういう場合が多いわけだ――その時に本当に聖書に食いついていなくてはいけない。我々のいるところは平和かもしれない。けれども、どこかで血生臭いことが起きて、苦しんでいる人、泣いている人がある。我々の現実としては普段、そういったことを祈りの世界で執成すような事態になければいけないわけです。

アフリカでは飢餓状態でしょ。どしどしいろいろな物を送ってあげるということは大変結構なことです。どれだけでもいいから、やはりクリスチャンはこれをしなければいかん。

「人がやるだろうから」

なんてではダメです。

「交通遺児のために」

と、よく街頭で募金をやっている。どれくらいでもいいから、やりなさい。私は必ずやります。とにかく、我々は実践しなければ。

「祈ります」

と言うときには、必ず祈る。献金をいただく時には、私は必ず祈っていただきます。キリストとの関係がそのように立っていなければ、祝福されない。もうはっきりそうです。

「憫みあるものは恵福なり」

という。キリストの憫みがなくなったら、どうするんですか。

相対的な平和であろうが、波が打ってようが、こちらの状態がどうであろうが、この絶

対者との関係が常にもの凄い現実となっていなければ、本当の信仰生活ではない。いざという時に、それがすぐ爆発するようなものを持っていないと。それは本当に自分が我無き我となっていることです。

「我れ無き我れが燃えるぞ」

とあの詩（『エン・クリスト』20号「無の光」）の中に書いたでしょ、無者ということを。私は時々、手紙に自分の名前を書かないで、

「キリストの無者」

と書く。そういう現実は正直、ありがたくてしょうがない。なんと楽でそしてまた力が来るだろうかと。これは神秘です。けれども、それは何でもない。その無は十字架がくださったんだから。悟ったのではないから。十字架という大事実が私にくださった。あなた方一人ひとりにくださった。そうしたら、聖霊という太陽の光よりも、空気よりも素晴らしい霊気が、「天地正大の気」がやってくる。

藤田東湖の「正大之歌」に、

「天地正大の気
粋然として神州に鐘る
秀でては不二の嶽と為り
巍々として千秋に聳ゆ
注いでは大瀛の水と為り
洋々として八州を環る
発いては万朶の桜と為り
衆芳与に儔い難し
凝っては百錬の鉄と為り
鋭利兜を断つ可し」

とある。天地正大の気があのような富士を造ったと、藤田東湖は凄いことを言ったよな。

「万のものは神の気によって成った」

と、詩篇にもヨブ記にも書いてある。そういう気の世界なんです。

「元気、元気」

と言うけれども、キリストの気をいただかなければ、本当の元気は出ないんだ。我々の持っているのは空元気だ。蓄電池と同じで、段々ダメになっていく。無限の電源をもっていなければね。電源はいつでもやってくる。それがありがたいんです、この信の世界は。

「私の信仰は…」

なんて言って、しゃっちょこばっている世界ではない。私はパリサイ・クリスチャンは大嫌いなんだ、成り上がったようなものは。

千年王国というのは、サタンをとっつかまえておいて、また放すと、また悪いことをす

るんだけれども。その放されている時に、いい加減な気持ではいかん。我々も普通の平和状態の時にいい加減な信仰ではダメだ。

「めでたし、めでたし」

ではダメだ。生活がなんとか行っているなんて言っていい気になっていてはダメだ、ということです。福音を忘れて、ただ生活の問題ばかりやっているのは、決して祝福されませんから、そんなことして儲けてみたって。論より証拠というけれども、神さまはちゃんとその人その人を日常生活で裁いている。現象するかしないかは別問題です。審判と救いはちゃんと来ているんです。審判と救いはドラマチックな構造で来ている。福音というのはそういう厳かなものです。自分をごまかし、人をごまかすことはできる。けれども、キリストを誤魔化すわけにいかない。魂の世界はごまかしがきかない。間違ったら平伏す、

「悪うございました」

と。キリストは「それでも」なんて仰らない。

「よし」

と、必ず迎えてくださる。人は何のかんの言うけれども、キリストは無条件で迎える。これがキリストの絶対恩寵です。十字架の恩寵がそれなんです。そのようにして、無条件に私たちは赦されたのだから、人を赦すことができないのはダメなわけです。主の祈りは

「許したるごとく、許したまえ」

という祈りではないですか。あれは「許したるごとく」という完了なんです。許していなかったら、人を容れていなかったなら、ダメなんだ。キリストはその祈りを聞きたまわない。

「どう思われても結構です。どうぞ、主さま、あれを何とかして助けてやってください、元にもどしてください」

と祈る。

「責める者のために祈れ」

とパウロが言ったのは、その通りです。

●第一の復活

4 我また多くの座位（くらい）を見しに、之に坐する者あり、審判する権威を与えられたり。我またイエスの証および神の御言のために斬（くびき）られし者の霊魂（たましひ）、また獣をもその像をも拝せず己が額あるいは手にその徽章（しるし）を受けざりし者どもを見たり。彼らは生きかえりて千年の間キリストと共に王となれり。5（その他の死人は千年の終るまで生きかえらざりき）これは第一の復活（よみがえり）なり。

これは祝福されるわけです。第一の復活がくる。神・キリストの他に地上のものを拝んだらダメだ。敬意を表することはいいですよ、拝んだらダメです。私は神社仏閣へ行ったら敬意を表します。信仰の対象として拝みはしません。

6 **幸福なるかな、聖なるかな、第一の復活に干る人。この人々に対して第二の死は権威を有たず、彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年のあいだ王たるべし。**

「第二の死」というのはもうこれ以上救いの望みのない死です。

『無の神学』の後ろの方に、私は図を書きましたね。あれが第二の死の所です。これが地上の悪の幕屋です。それが十字架を通って、ひっくり返って向こう側にいく。これが天上のパラダイスです。時はこう流れる。ここが終末で、新天新地がくる。最後の審判。この真下、ここが第二の死。こちらはゲヘナ、仮地獄。これが本地獄。こっちが本天国。そういう図を私は書いた。本当の信仰で生きた人は、傷ついて十字架を負っていった人は、天界で恩寵にあずかって、この第一の復活の世界にいくわけだ、第二の死は、こういう人に対してはもう権威を持たない。

7 **千年終りて後サタンは其の檻より解き放たれ、8 出でて地の四方の国の民、ゴグとマゴグとを惑し戦闘のために之を集めん、その数は海の砂のごとし。**

「ゴグとマゴグ」のことはエゼキエル書38、39章に出ています。「マゴグ」というのは地名で、「ゴグ」というのは、メシェクとトバルの王者の名前です。エゼキエル書というのは不思議なところだな。

9 **斯て彼らは地の前面に上りて聖徒たちの陣営と愛せられたる都とを囲みしが、天より火くだりて彼等を焼き尽し、10 彼らを惑したる悪魔は、火と硫黄との池に投げ入れられたり。**

いくら糾合したって、これはみなやっつけられる。マルチン・ブーバーがゴグとマゴグのそういう事を書いている文献があります。ハルマゲドンの戦いのような最後の戦いで、これでもう全部おしまい。

ここは獣も偽預言者もまた居る所にして、彼らは世々限りなく昼も夜も苦しめらるべし。

偽預言書がたくさんいるよ。ダンテも言っているけれども、死よりも苦しい。死なないんです。永遠の苦しみの中におかれる。死にたくても死ねない。

●生命の書

11 **我また大いなる白き御座および之に坐し給うものを見たり。天も地もその御顔の前を遁れて跡だに見えずなりき。12 我また死にたる者の大いなるも小なるも御座の前に立てるを見たり。而して数々の書展かれ、他にまた一つの書ありて展かる、即ち生命の書なり、死人は此等の書に記されたる所の、その行為に随いて審かれたり。13 海はその中にある死人を出し、死も陰府もその中にある死人を出したれば、各自その行為に随いて審かれたり。14 斯て**

死も陰府も火の池に投げ入れられたり、此の火の池は第二の死なり、15すべて生命の書に記されぬ者は、みな火の池に投げ入れられたり。

「信仰にしたがって」と書いてない。全部、

「行為に随いて」

と書いてある。

「本当の業は何か」

と聞いたら、キリストは、

「神を信ずる之なり」

と言った。それでは矛盾するではないかと。矛盾しない。信行一如ということです。本当の行いは必ず信から発している。信から発していないところの行いは、偽の行いです。消えるような行い、泡のような行い。本当の行為は信から出る。この行為は信行一如の行為です。「しんこう」とは

「信行」

と書いたらいい。キリストは全くこの信行のひとです。神の中に百％に信入しました。信入すると、行為が出ざるを得ない。現象せざるを得ない。行為の奥に、じっとしている行為がある。それが爆発して行為となる。

マルタとマリヤの話がある。マリヤはキリストの話をじっと聞いていた。

「お前はよい方を選んだ」

とキリストは言われた。マルタは一生懸命でおもてなしをしようと思ってやっていた。マルタが、

「私がこんなにやっているから、マリヤにも手伝わせてください」

とキリストに言った。あんなことを言ったのが間違っている。マルタの方の行為が信から発していない行為だったから。そんなことは言わないで黙って動いていたら、キリストはマルタも誉めたにちがいない。ところが、キリストには行為の姿が分かる。マリヤはとにかくじっくり聞いていた。信の世界に信入している。聴入している。聴き入っていると、身体で聞いているから、信の世界に入る。そうしたら、行為に現れざるを得ないということになる。だから、本当のマリヤは必ず本当のマルタになるし、本当のマルタはその奥に本当のマリヤを持っているということなんです。あれは決してマルタとマリヤを比較してはいけない。マリヤ・マルタは一如でなくてはいかんということです。そこまで誰も言わないね。なぜ、みな分析するんだろうね。相対比較はダメです。

人格関係というのはみな一対一の絶対関係ですよ、お互いさま。

「誰さんがどうだ、こうだ」

ではない。一人ひとりの関係はキリストにあって絶対関係なんです。他のものと比較ができない。a、b、cの各個人はキリスト（X）との縦の関係があってこその横の関係なんです。

縦の関係は平安で、横の関係は平和です。このａｂｃはいわゆる三角関係でなくて円になってしまう。いかなる三角も必ずその三点によって円がかける。この三角関係は円還関係です。これ（Ｘａｂｃ）は三角錐体ではなくて円錐形になる。我々は円還関係なんです。何人いても円還関係です。人間は、女性は妬み、男は争う悪い癖がある。その妬み争いから解けるのは、キリストとの関係が本当に立っていれば、本当に円還関係、円現していくわけです。

「生命の書」ということ。私たちはキリストの生命を本当にいただいていれば、生命の書に書かれている。地上の歴史はどんなに我々を疎外したり、忘れ去っても、天界の生命の書には書かれている。人間の書いた歴史というものは大したことはない。神さまが書いていらっしゃる歴史が、これが大変な歴史です。

その神さまの歴史のひとつの、投影しているものがこの聖書なんです。聖書はドラマですから。黙示録の終りは素晴らしいけれども、今度は本当に神さまの新天新地が来たときは、これ以上であるんです。これは一つの徴なんです。ヨハネはこのようにしてパトモスの島で示された。けれども、その示されたままがやがて来るのではない。それはやがて来る世界の徴として顕れている。現実はもっと凄い。いかなる芸術家もこれを書くことができない。

ミケランジェロも彫刻していて、終いにはノミを投げてしまう。完成しない。完成しないのが本当だということ。地上で完成したものは大したものではない。だから、私も安心して詩にかかっている。未完成交響楽だ。三日月は満月を抱いている。天界においてこれが完成する。とにかく、もの凄い気魄のものです。

「汝、今日、我と共にパラダイスにあり」

という言葉が私は大好きなんですが、我々はいつもキリストに、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスを歩いているようなものではないか」

と言われている。絶対に行き詰まらない。

「地上は、行き詰まったり、調子が悪かったり、いろいろな時にこそ、お前には逆に力が来るんだぞ」

と、そういう信の世界でなかったらダメですよ。

「どうもこの頃少しスランプです。調子が悪い。集会の敷居が高いです」

とか、何を言うか。さっきのルカ伝14章みたいに、キリストを断ったらダメですよ、キリスト第一義でもって生きていないと。大変なものですよ、これはドラマですから。もぅ、楽しくて、力が来てしょうがない。この生命の書に記される。しかも、それは霊的な輝ける文字だ。